

山田科学振興財団に期待すること

森 正樹（東京大学宇宙線研究所）



国立大学は法人化後、運営交付金には毎年1%ずつの削減が課せられ、学内資金による新規の研究は難しくなり、外部資金の獲得努力がますます求められるようになった。一方、外部資金として大きな割合を占める科学研究費補助金の総額は毎年伸びを見せているが、各大学が応募を奨励していることもあり、研究課題の採択率は下がり、獲得競争はむしろ激化しているといえる。また、重点化に伴い大学院への進学者は大幅に増加し、学位取得者は増えたが、大学や研究機関においては博士研究員のポストは増えても常勤の研究教育職の数は減少傾向であり、その結果としてポストドクター問題も深刻化している。このような状況において山田科学振興財団に期待する役割について意見を述べさせていただく。

世間の大学に対する期待も進学率が高まるにつれ変化してきていると感じる。大学の新設学部の名称にも顕著に表れているように、実学が重視され、社会において即戦力となる人材の養成に重点が置かれる傾向が高まっている。しかし、学問は確かな基礎の上に築いていくものであり、基礎研究をおろそかにしては学問の発展はありえない。このような研究は実用に

つながるかという観点から評価することはできない。しかし、実用的な研究に比べて基礎的な研究は、学問の体系からその位置付けがしやすいため、学問の中での評価は難しくはないといえる。問題は実用的な研究と基礎的な研究に対する資金の投入のバランスであろう。一方、萌芽的な研究として試行錯誤することが将来の発展のために必要であることは論を俟たないが、それまでの研究実績とは離れたところにこそその価値が生まれるのであり、しかも成果が全く得られないかもしれないというリスクは避けられない。研究資金の獲得においても、実績が重視され過ぎると萌芽的な研究は不利になる。将来につながる研究を拾い上げる資金供給側の審査の「目」が問われることにもなる。本財団が実用志向研究でなく、萌芽的・独創的な研究を援助対象としている点は誠に潔いものがある。我々が援助を受けた研究も、大規模な装置であるすばる望遠鏡に手作りの天体ガンマ線観測専用のチェレンコフ光測定器を持ち込むという萌芽的・独創的なもので、他の資金とともに実現にこぎつけることができたことには大いに感謝している。観測時間の割り当てを受けることが難しく、設置条件からくる装置への制約などの問題もあり、得られた成果は画期的なものとは言えなかったが、大型望遠鏡を用いたチェレンコフ望遠鏡による高エネルギーガンマ線天文学の近年の急速な発達に寄与することができたと思っている。本財団のこのような姿勢を支持するとともに、これからの発展をお祈りしている。